



粋
IKINANA
NANO KAMACHI,
YAMAGATA

粋七手帖
つくる編

行きたい、七日町へ

紅花通り（諏訪町七日町線）やシネマ通り（香澄町七日町線）周辺は、歴史の積み重ねや人々のふるまい、風情ある建物が連綿と続く、非常に豊かな価値を持った魅力的なエリアです。

映画館の記憶を残す通りの名前としての「シネマ通り」、料亭文化を今に伝える四山楼や旧料亭のゝ村、そして建昌寺、法祥寺、長源寺といった寺町の風景が今なお残り、そこには今を生きる人々の暮らしも息づいています。

このエリアの整備にあたり、その価値を象徴する言葉として、「粋な町七日町」、略して“粋七”というコンセプトを掲げました。

整備が完了した暁には、この町に住む人、店を営む人、訪れる人が互いに「粋な町だね」と声を掛け合えるような、あなたとわたしの「粋」が出会う場所になることを目指しています。

「粋」とは、辞書を引くと「気質・態度・身なりなどがさっぱりと洗練されていて、しかも色気があること。また、そのさま」とあります。そこには、奥行きのある人間らしさや懐の深さを感じさせる響きがあります。

出会いは、人と人とがゆっくりとした時間を共に過ごすことから始まります。それは車に乗って通り過ぎるようなものではなく、人が歩き、ふと立ち止まることで生まれるものです。

もともとは「車のための整備」として始まった紅花通り・シネマ通りの計画を、私たちは「人のための整備」へと方向転換し、“小径と余白のある町”を整備方針として掲げてきました。

建物の正面を車道に向けるのではなく、まちなかを巡る小径に面した構えとすることで、人が歩きたくなる町、佇みたくなる場所、そして思わず入りたくなる素敵なお店が点在する町をつくっていかうとしています。

この手帖は、七日町での暮らしや商いを育んでいくために制作された「粋七手帖」の続編として、主に建築の再建や新規店舗の誘致を考える際に参考としていただくためのものです。

内容は「問いかけ」を中心に構成しており、具体的な解答を提示するのではなく、それぞれが明確な意志を持って建築や空間に向き合うための出発点となることを意図しています。

問いに対する答えは一つではありません。この町で何を大切にし、何を表現するのか。それぞれの建築や店舗が、その答えを空間に込めていくところこそが、七日町の魅力を育む営みだと考えています。

一人ひとり、一つひとつの店舗がこの場所での時間を慈しみ、手をかけていくことで、町は着実に成長し、魅力を増していきます。

この手帖が、七日町での「粋な暮らし」を考えるきっかけとなることを願っています。

粋七手帖 つくる編

本冊子はこれからの建築を計画される方や、店舗（テナント）を予定している方に向けて、七日町らしいアイデンティティをまとめていくための一つの考え方「問い」と「工夫」を示したものです。

インターネット、SNS の普及によって、どこへでも瞬時に行ける時代になったからこそ、「ここでしか味わえない」時間を過ごすことが、良き時間となり、人々の思い出となり、町の記憶、ひいては町の歴史になっていきます。

ここ、七日町は新しい物やことに会える町です。一方で堅牢な歴史の土台にあるのも七日町ともいえます。温故知新を体現する場所として、様々な人々が育ててきた七日町をまた新しい七日町へ引き継いでいきます。

目次

- 6 一、 集積する七日町
集積の面白さと魅力
- 10 二、 集積の内なる作法
粋七建築の原則と七つの視点

一、集積する七日町

集積の面白さと魅力

山形のまちなかや、少し外れた場所を歩いてみると、そこかしこに文化の香りが漂い、人々の振る舞いが見えてきます。

四方を山に囲まれたこの土地では、地形や気候、土壌が豊かな食文化を育み、かつて伊藤博文が料亭を「四山楼」と名付けたように、風土と暮らしが深く結びついています。

七日町もまた、そんな文化の積層の中にあります。通りを丁寧に歩けば、歴史や工夫、さりげない美しさがそこかしこに見つかります。そしていま、このエリアでは、同じ時期に複数の建物が建て替わるという、これまでにない機会が訪れようとしています。

「景観」というと、同じような建物が整然と並ぶ姿を想像されがちですが、本当に魅力的な町とは、用途や店構えに応じてそれぞれの表情を持つものです。住まい、物販、和食、洋食——目的や思いが異なれば、建物の佇まいも異なるのが自然です。大切なのは、個性ある“自由さ”を受け止めつつ、それらが調和し合うことです。

とはいえ、ただ自由に建てればよいというわけではありません。無秩序なまちなみは混沌や雑多さを生み、歩きづらさや視覚的な疲れを生むこともあります。それは、訪れる人にも、お店を営む人にも不利益となるでしょう。

「今日はどこに行こうか？」という問いに対して、「粹七に行こう」「御殿堰に寄ってみよう」「七日町で過ごそう」とエリア名で選ばれるような町は、個性と集積が共に育まれている証です。訪れる人の滞在時間が長くなれば、商業的にも有利に働きますし、文化を感じる町の魅力は、暮らす人にとっても誇りになります。

自由と秩序が共に息づく、居心地のよい七日町へ。これからの建て替えの中で、その未来を少しずつ育てていきましょう。



二、集積の内なる作法

粹七建築の原則と 七つの視点

七日町では、さまざまな用途の建物が建てられることが見込まれています。こうした多様性の中で、エリアとして一体感のあるイメージを形づくるために、本冊子では「粹七建築」の原則と、七つの視点をまとめました。

「原則」は、具体的な設計手法というよりも、七日町や山形市でこれまで受け継がれてきた建築文化や空間のあり方を言葉にした、より大きな概念です。気候変動などの変化がある中でも、こうした原則には、変わらず価値を持ち続ける文化的な意味があります。

「視点」は、同じく概念的ではありますが、より具体的な設計の工夫や、空間に対する配慮を示しています。

もちろん、建築には用途や予算の都合があり、すべてをそのまま実行するのは難しいかもしれません。けれども、こうした原則や視点を共有し、近隣と連携しながら建て替えや改修を進めることが、七日町をより暮らしやすく、使いやすく、そして未来へと続いていく場所にしていくための一歩になります。

実現できるところから、ひとつずつ取り入れていきましょう。

原則

時間を経て
価値を生む

中間領域を
形成する

七つの視点

1. いい大きさでつくる
2. 居場所をつくる
3. 境界を柔らかくする
4. 色に気をつけてつくる
5. まちあかりをつくる
6. 見せかたにこだわる
7. 対話を通してつくる

時間を経て価値を生む

様式 / 素材 / 資源

山形市内には、昔から受け継がれてきた暮らしの様式や、建築物、土木構造物など、今もなお私たちの身近にある貴重な資源が数多く残されています。

これらは、時の流れとともに育ち、価値を深めてきたものです。

資源は、一見すると無限にあるように思えるかもしれませんが、実際には限りあるものです。だからこそ、過去の人々が大切に守ってきたものを活かしながら、新しくつくるものは「時間」を意識して、丁寧に育てていくことが大切です。

それが未来の資源となり、七日町の文化がこれからも息づいていく礎になります。ひとつの目安になるのは、「人の命より長く残るものかどうか」という視点かもしれません。



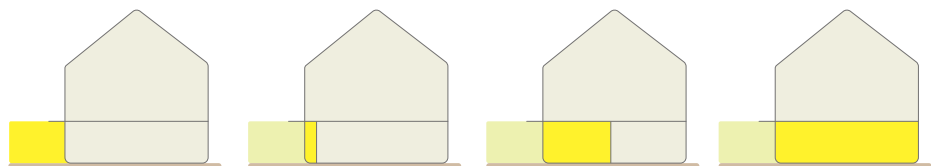
中間領域を形成する

内と外 / 家と外 / 私有地と公共用地をつなぐ中間領域

建物と敷地の境界、隣地とのあいだ、そして道路や歩道と接する場所——それらは単なる境目ではなく、人を迎え入れ、さまざまな時間の過ごし方を受け止める「余白」としての役割を持っています。

山形のまちなかには、深く張り出した庇（ひさし）、土間、中門の奥に広がる庭や木陰など、敷地と町を柔らかにつなぐ工夫が息づいています。

建て替えを機に、こうした空間のあり方を意識してみてください。建物と建物のあいだに生き生きとした場所が生まれ、町はより豊かで魅力的になっていきます。



七つの視点

問いと工夫 / 考え方

七つの視点では、それぞれの視点に対して、a. 基本的な考え方を示しつつ、考える上での質問【Q(Question).】と、質問に対する参考事例として設計などでの工夫【C.(Creativity)】の例を示しています。細かな工夫は専門書や設計者に任せつつ、一例をご紹介します。また、工夫は今後策定予定のまちなみデザインルールに向けた考え方【Idea】を示しています。

ページの構成

a. 基本的な大切にしたい考え方



Question. 考える上での質問



Creativity 設計の工夫



Idea 考え方

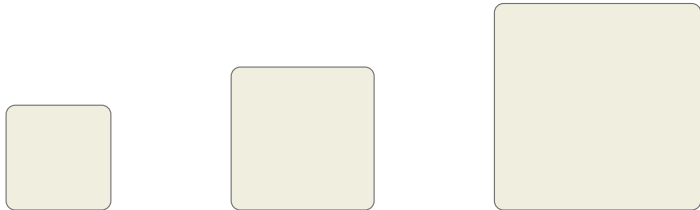
💡 +ポイント



いい大きさでつくる

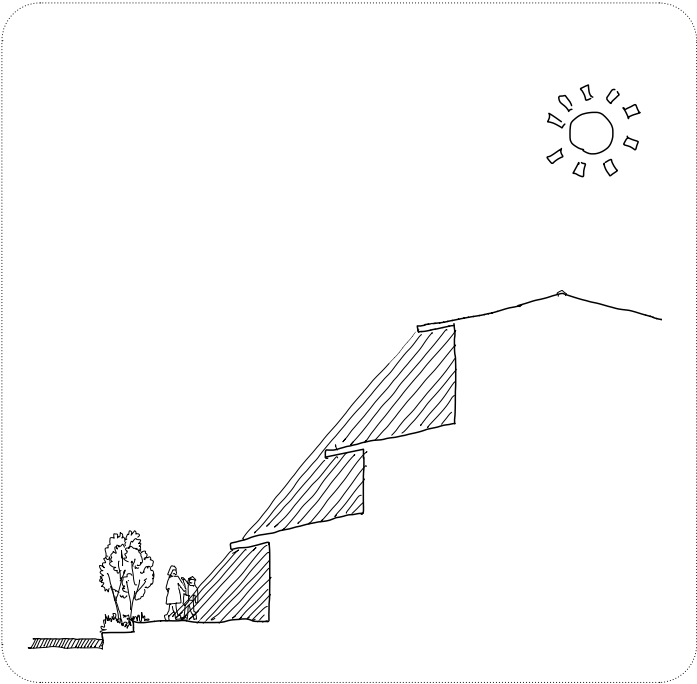
新しい土地に、新しい建物をつくる。まずは、必要な諸室の洗い出し、それらの大きさ、その総和としての建物の大きさを考えてみましょう。

今までの建物とは異なり、周囲の環境や土地の大きさが変わり、必要な面積が変化すると思います。設計者とともに、“自分らしい”建物の在り方を考えてみましょう。



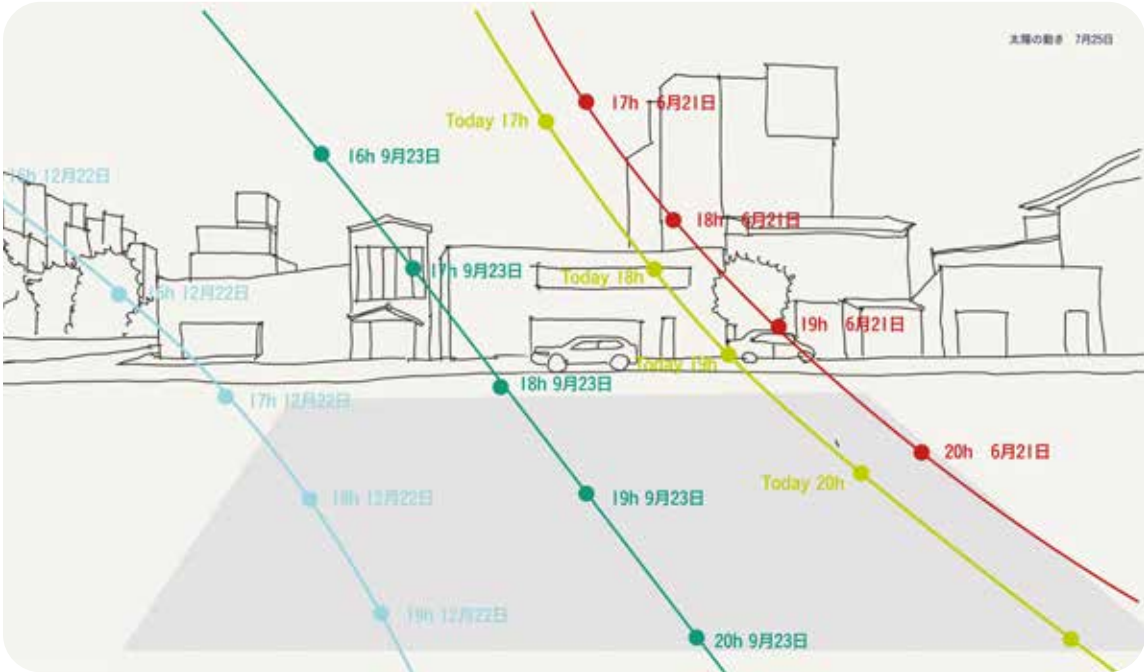
Q1

敷地や小径などの周辺環境に
ふさわしい大きさを知るには？



粹七手帖 段階的な大きさ (No.32)

【C1】敷地に立って想像してみる



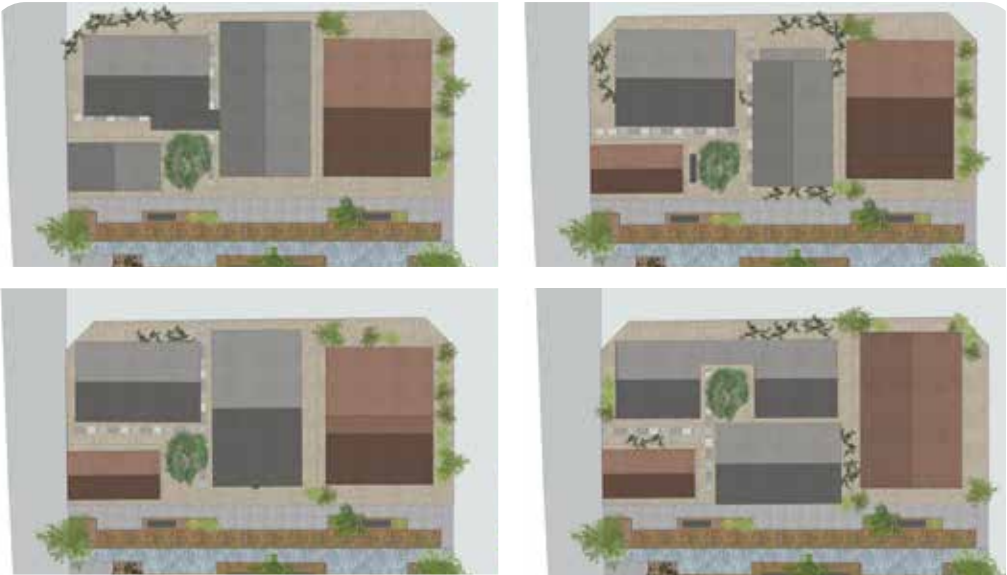
季節によって異なる太陽の動き

【Idea】

計画地を見渡せる場所に立ち、これからつくろうとしている建築を想像してみましょう。壁はここからあの辺りまでだな、高さは3mだから、隣の建物からすると、このあたりまでか。そうすると屋根はこんな具合になるのかな。こんなふうに実際の大きさを意識しながら、これから生まれようとしている建築を思い描くというのは、単純な取り組みですが、机上の議論を現実世界につなぐ有効な手段となるでしょう。

Q2

どのように配置を
決めますか？



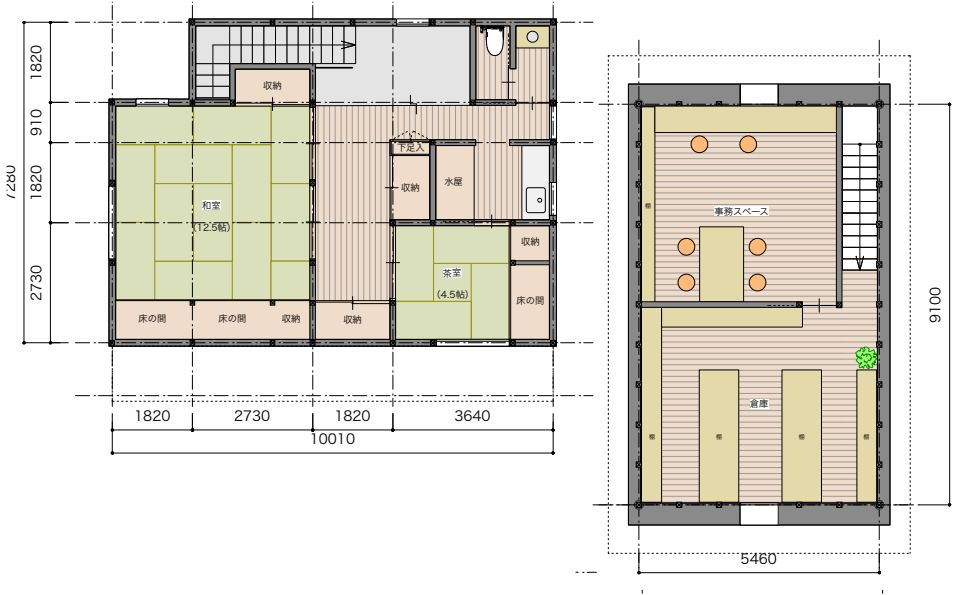
【C2】様々な表現方法で
建築を見てみる



【Idea】
建築を一度建てたら、そう簡単には動きません。そのため、建築設計では模型をつくることを繰り返し、建物のボリュームや在り方を検証します。もちろんコンピューターを用いた、イメージで検討することもできますが、大きさや広がり、同時に多方向から眺めることができたりと、模型のもつ情報量が圧倒的に多いことは、昔も今も変わりません。

Q3

部屋の大きさを
考え直すには？



【C3】長い目で部屋の使い方を
想像してみる

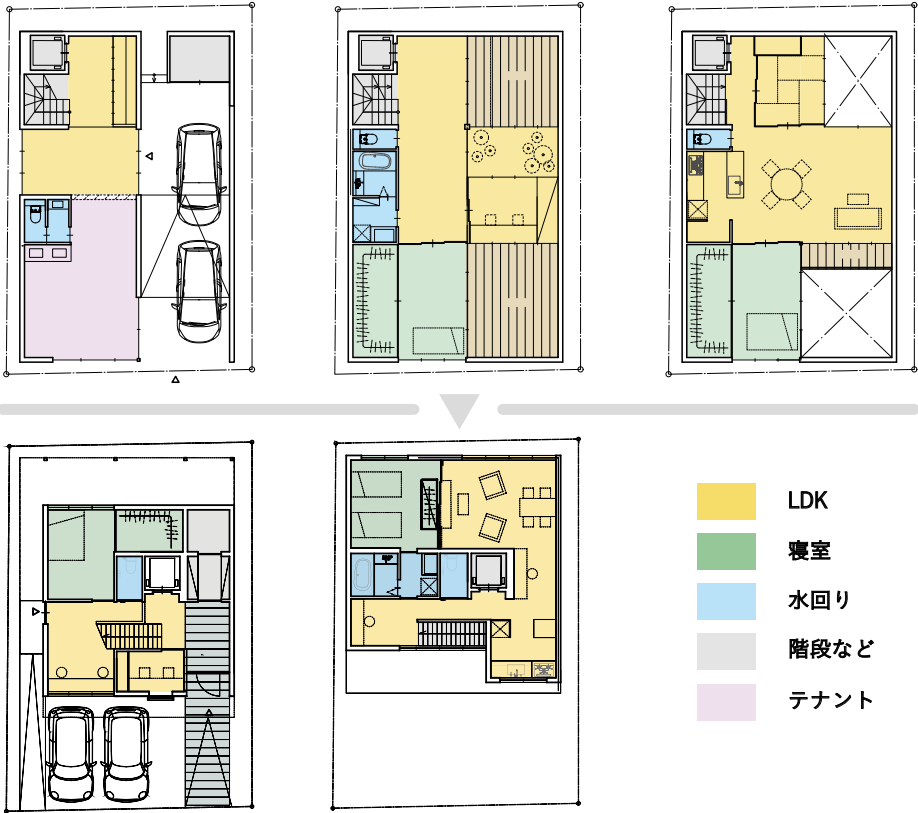


【Idea】

家族構成の変化、断熱性能の向上、住まい方の変化といった、住まいを取り巻く環境はこの10年で大きく変わり、大きな流れとしては、住まいの間取りが単純化しているように思います。特定の使い方に特化した部屋の意味合いは薄れ、ワンルームの中に様々な場があるような見立ても一般化しつつあります。これまでとこれから、少し長い時間軸で考えてみましょう。



機能を重ねて
小さく建てる



必要なそれぞれの場所を区切るプランから、ひとつながりの間取りに発展させた例。水回りを囲むようにワンルームをつくり、家具や間仕切りを組み合わせながら、その時々の使い方にあわせて変化する柔軟な間取りとすることで、廊下をなくし、全体面積は小さくなっています。

居場所をつくる

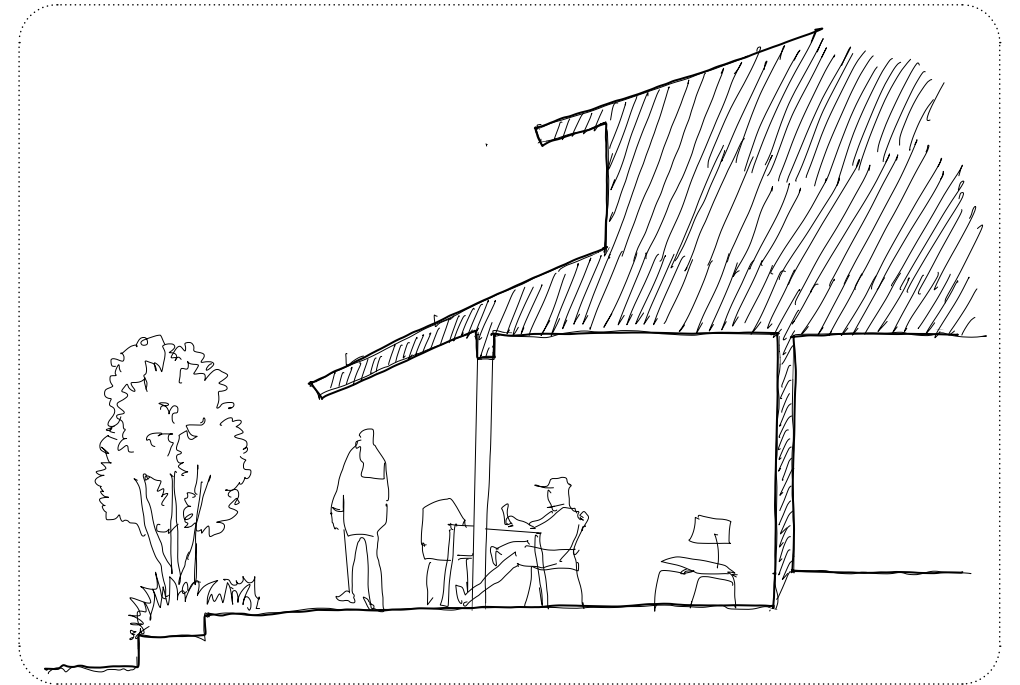
変化する七日町ですが、この土地に関わりのあるみなさまの声を集めると、新しく生まれた環境を散歩してほしい、という声が集まりました。

自分自身が散歩する時を思い浮かべてみましょう。目的がなくても訪れたくなる場所になるため、そこには新しい発見や居心地の良い場所が必要になるでしょう。



Q4

どんなところに
人は留まるか？



粹七手帖 人を迎え入れる場所をつくる (No.15)

【C4】余白を大切にする



【Idea】

粋七エリアの骨格は、堰や小径を軸に広がる公共空間に、個人所有の建築が絡み合い、エリア全体が群として魅力的な場をつくるように考えられています。みなさまの個人の領域から公共領域に向けて、中間領域を生み出すことによってさらにその魅力が増していきます。そのヒントとして、人々が溜まる場所はどこなのか、北欧のまちなみ写真を例に、人が立ち止まっている場所に印をつけ、その理由を想像してみました。このようにして、お気に入りの街角の写真を見直してみると、工夫のしどころが見つかるでしょう。

Q5

七日町が生み出す
魅力的なまちなみの姿は？

(1) ご自身の建物タイプを選んでみよう

【建物の形状】
フラット 切妻 切妻+平入り

【平面タイプ】
囲み型 角なし 土間 フラット

【間取り】
壁 ぼつ壁 大開口

【軒・庇・壁】
庇 新 フラット

(2) 目指したい建物のイメージは【建物選択】 (3) ご自身で気づいた言葉を書いてみましょう

温かい 個性のある 隠れた 歴史のある 明るい ガラス張り 入りやすい 入りにくい
開放的な 家族で来る ホットする ゆとりある こじんまり アートホーム 他にはない

(4) 建物の付随する「特徴 (tag)」を考えてみよう

【色】 切妻 フラット 庇 新 気取れない 凸凹がある 窓

【素材】 木 石 コンクリート ガラス プラスチック 土壁 漆喰 煉瓦
ステンレス アルミ 金属 サイディング 陶器 手仕事を感じる

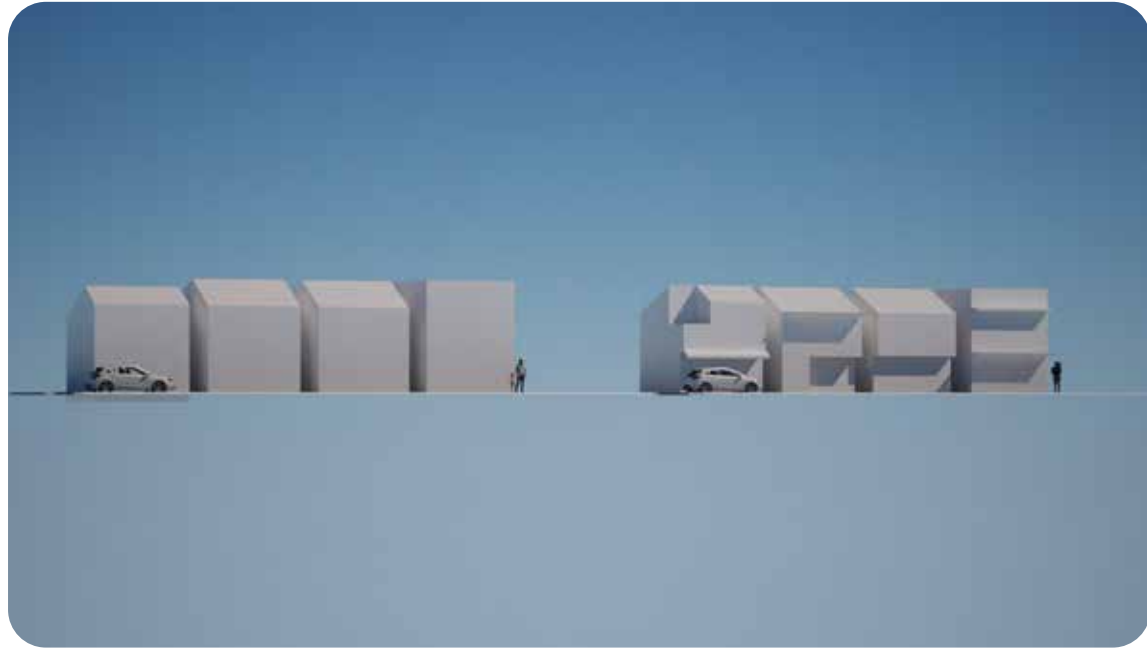
【色彩】 明るい 暗い 彩度低 落ち着いた 少ない色 ツヤ消 ツヤ有

【建物の配置】 隠蔽 小さな建物 光 木造 木造 小さな窓 名刺利用 緑地のある
子どもの居場所 トンネルのぼる木 雨・雪に濡れる場 リードアップ (2) 店先の灯り こぼれる光 ベンチ
人を持つ居場所 鳥が来る家になる木 テラス席のある ショーウィンドウ チョウチョも居よう



まちなみデザインルールを考える第3回より
上：まちなみを想像してみるシート
下：みんなが形成したまちなみ

【C5】多様でありながら 連帯感を育む

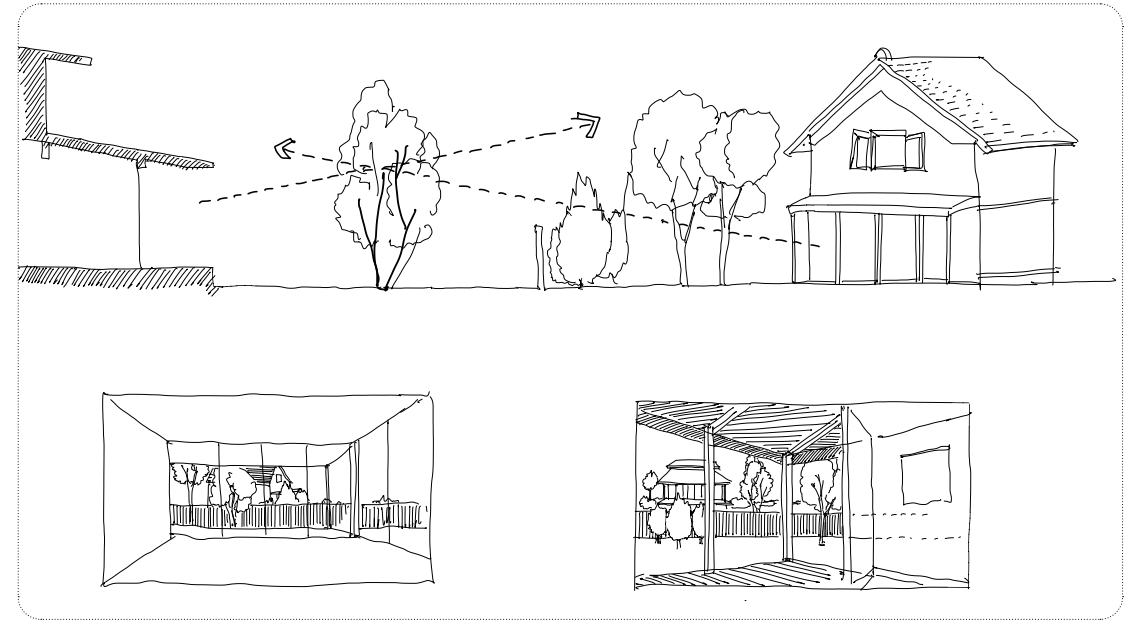


【Idea】

目指す方向性は、多様性と連帯性のちょうどよいバランスを図ることです。多様性は、皆さんが必要だと思う機能や大きさ、あるいは好き嫌いを素直に表現することにより自然と生まれてくるものです。ただし、そのままではちぐはぐなまちなみになってしまいます。連帯性との関係を考える必要が出てくるわけですが、抽象的でわかりにくいものです。そこで、色や形、町との接点を持つことを基本として整理したこの冊子や、話し合いの機会を設けていますので、いつでもお気軽にご相談ください。

Q6

隣の建物との関係は どうなっていますか？



粹七手帖 お互いが借景 (No.5)

【C6】離れたところから 敷地を眺めてみる



出典：長谷川竹葉〈山形縣新築之図〉 山形美術館所蔵

【Idea】

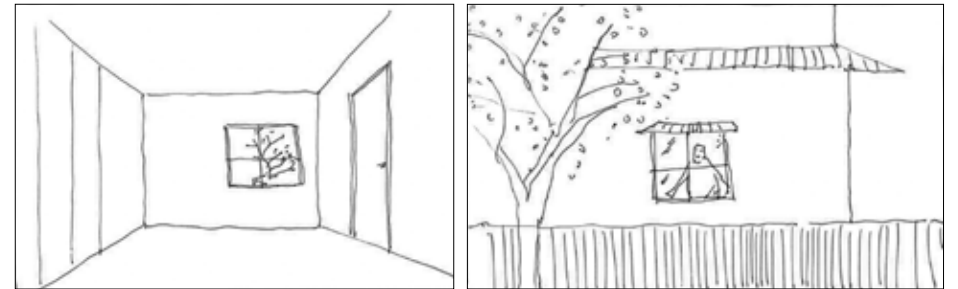
七日町のルーツは商人街～寺町であり、整備後も、路地がくまなく広がり、表裏がなく、密度が高いといった都市的な特性を継承します。このような場所で計画するには、郊外の住宅街と異なる視点が必要になります。一つの方法は、色々な場所から計画地を眺め、どんなふうに見えるのか確認することです。思わぬ方向に開けていたり、周辺の建物との関係が見やすくなったりします。発見したことを設計者に返すことによって、更に良い計画になるはずです。



こんなふうに考えてみる



離れたところから、周囲の環境と合わせて想像してみると、どんなふうに見えていますか。刻々と変わる新しい町だからこそ、周りとの関係性は小まめにチェックが必要です。



室内から窓の外を眺める場合、外から窓を眺める場合と、ひとつの部分に絞って想像してみることも忘れずに。

境界を柔らかくする

建築物全体に資金の多くを投じてつくることは難しいことがあるかもしれません。

人は歩行するときに、視線を水平から 10° ほど下げると言われています。視線の先のしつらえを工夫することにより、商業エリアとしての機会創出につながるでしょう。

高価格帯のマンションなどもエントランスや低層部の作り方が丁寧になっています。建築を立ち上げ時に資金を振り分ける優先順位は何か、店舗や建築の見せかたを考えましょう。



Q7

目線の先にあるものは？



粹七手帖 店先で店を伝える (No.47)

【C7】境界線を消してみる



【Idea】

ちょっと入りにくい店、入ってよいのか判断が付きにくい店、あります。設計者の視点に翻訳すると、バリアがあるということになります。その原因は何か。理由は様々ですが、境界線がはっきりと示され、かつ情報量が少ないため立ち入ってよいのか判断できない状況が多いでしょう。そんなときの建築的な処方箋は、境界線の内外で同じ床仕上げを継ぎ目なく敷き並べる手があります。もちろんそこには所有権上の境界線はありますが、ぱっと見は気づかず、いつのまにか店先に立ち入っているということが起こります。

Q8

どんな開き方があるのか？



【C8】外との関係性をつくる



出典：初代 歌川 広重「湯殿山道中略図」 本間美術館所蔵

【Idea】

建物の内と外は、いっそう距離が開いています。なぜなら昨今の省エネ化の流れは、建築の開口部を小さく、厚くする方向に結びつき、閉じた住宅が大量に生まれています。そこで原則にも上げた「中間領域」の重要性が見直されています。これは、江戸時代より世間に浸透した考え方で、例えば縁側は、室内／縁側／庭（外部）をグラデーションにつなぐ機能を果たします。広重による浮世絵では、暖簾で中間領域をつくっています。建物の外側に薄い布切れを足すことで、もともと外部空間だった場所を少しだけ内部的にしたわけです。内外をつなぐ手段として、文字通り透明性を上げるという方法もありますが、暖簾のように境界の外に曖昧な空間をつくることにより、境界を柔らかくすることができます。

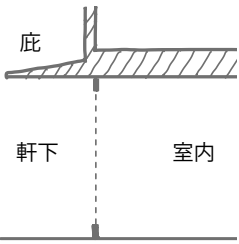
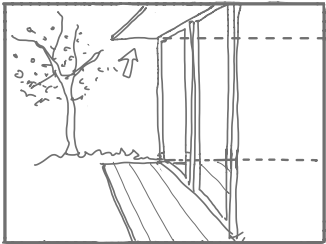


中間領域のつくり方

中間領域をつくるポイントは、外部を内部らしく、内部を外部らしくしていくことにより、内外の距離感を小さくしていくことにあります。こうした工夫は、ちょっとした視点の転換で実現できます。いくつかの空間のかたちを紹介します。

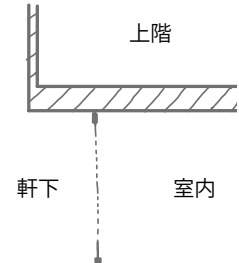
💡 窓上に庇型

シンプルな手段。ただし雪の重さに注意が必要です。柱をつける方法もあります。



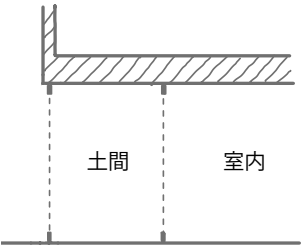
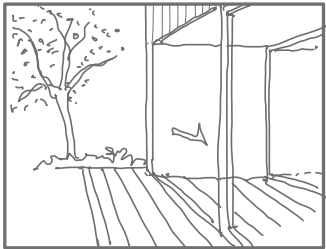
💡 上階せり出し型

建物自体の外形でつくるため、十分な強度を確保しやすいです。建物配置に工夫が必要な場合があります。



💡 2重サッシ＋土間型

内部にも外部にもできる可変性が魅力。前項同様、構造的に安定させやすい。床面防水に工夫が必要。



色に気をつけてつくる

灰色という色は文字で表すと1色ですが、右は日本の伝統色でいうところで灰色に分類できるものです。文字にすると赤や緑色に見えるものももちろんあります。

色は言葉にすれば単色になりますが、本来はグラデーションなので、色味（色相）と彩度（鮮やかさ）と明度（明るさ）によって色が決まります。ご自身が求めているものはどのような色なのか、丁寧に色の組み合わせ含めて検討してみましょう。

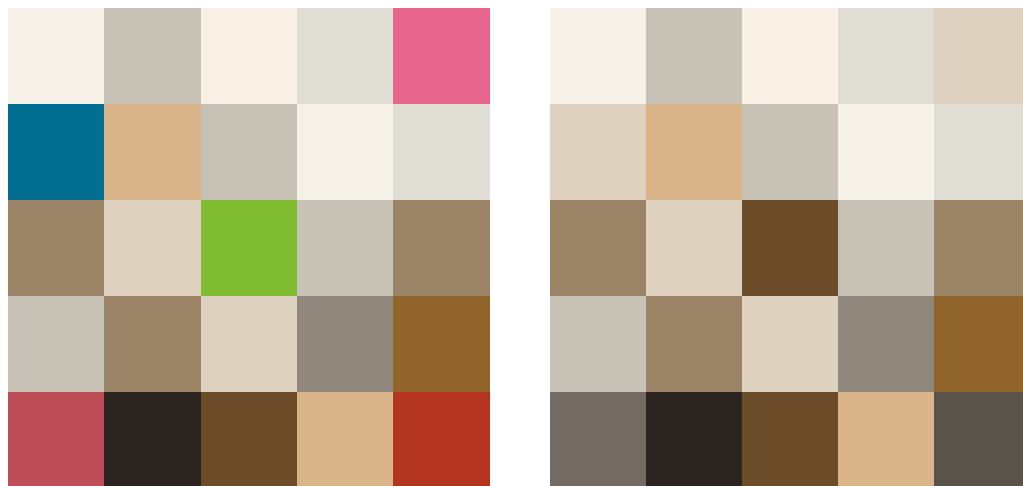


Q9

どの色が求めている色ですか？



【C9】 周りをよく見て考えましょう



【Idea】

色の見え方は『周囲との関係性』が重要です。両隣のある建物がどんな色・素材かによって、見え方が大きく異なります。単色・単体・部分で善し悪しを決めるのではなく、向こう三軒両隣（まちなみ）をよくみて、素材や色調、明るさの程度など、何かしらの共通性を持たせましょう。

例えば、上の絵では左右とも、多色です。でも右は似ている色相（色味）で、色相のまとまりがあります。似ている色（暖色系の穏やかな色）であれば、濃淡の変化があってもまとまりのある印象が保てます。

Q10

色と素材は表裏一体 どの素材を使いますか？



【C10】 まちなみに／用途にふさわしい素材 を取りいれましょう

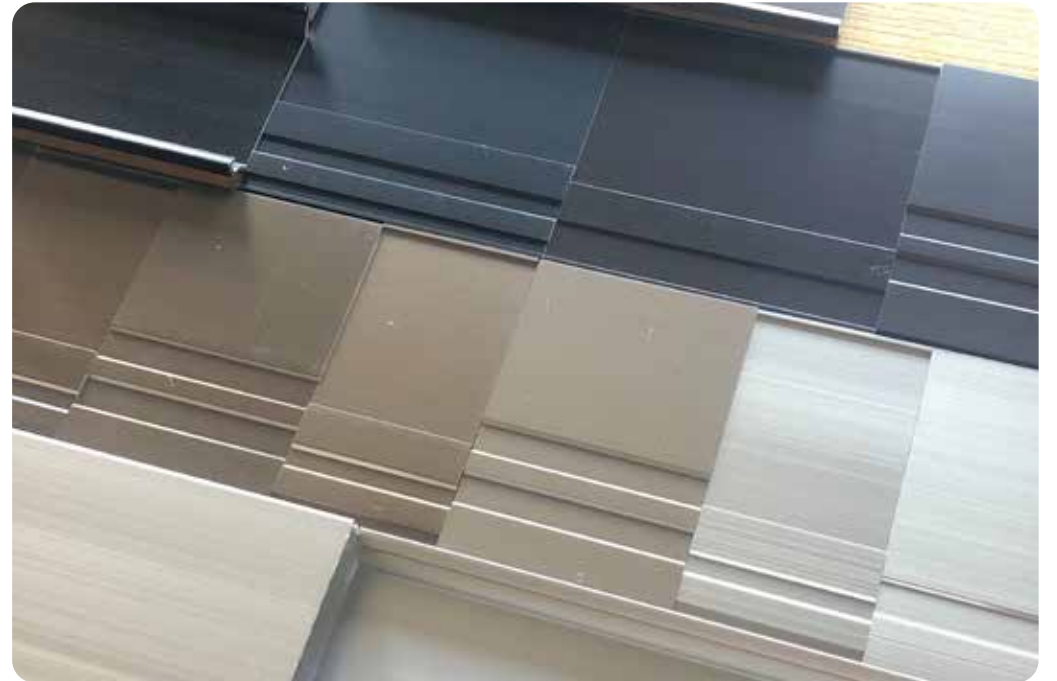


【Idea】

建築物は古くは自然素材のみで建築されてきました。自然素材の多くは穏やかな・落ち着いたのある色調が中心で、時間の経過とともに味わいや風格を増していきます。一方、自然素材は風雪の影響を受けやすく、現代では耐候性・耐久性の良い新建材が次々と開発されています。新建材を選ぶ際は、旧来の自然素材が持つ質感や色調を参照しましょう。また自然素材も新素材も貼りがた（縦と横）でも印象が変わります。建物の雰囲気に合わせて最適を探しましょう。

Q11

使用する材料の 「現物見本」は確認しましたか？



ブラウン系、ブラック系のアルミサッシ、とひとくちに言ってもメーカーごとに色味が異なります

【C11】部分ではなく、 全体を見ながら考えましょう



【Idea】

例えば選んだ壁の色が『適切かどうか』の判断は難しいものです。屋根、壁、建具、玄関周りの床材…等、外観を構成する要素を一堂に集め、それぞれの部材が心地よいハーモニー（調和）を奏でているか、よく見て響きあいに耳を傾けてみましょう。



人の気配や四季の自然の変化を取り入れ 歩くのが楽しくなるまちなみへ

色彩の調和を意識し、
「心地よいリズムやテンポ」をつくり出しましょう

💡 現物確認

小さな見本では、適格な判断は難しいものです。色の決定は現物で・屋外で行いましょう

💡 外観の色彩

外壁や屋根・建具等には十分に光沢を抑え、落ち着きや風情を大切にしましょう

💡 自分の表現を

こだわりのサインや暖簾、ディスプレイ等、道行く人が興味を引く「しかけ」を工夫しましょう

💡 サッシの色味

サッシや建具、雨樋や水切り金物・吸排気のカバーなどは外壁の色に馴染むよう「同色系」を選びましょう

💡 まとまりをつくる

かたちか、あるいは素材や色か…いずれかの要素を揃える（合わせる）と、自然なまとまりや連続性が生まれます



💡 気軽に立ち寄る

店舗の場合は中の様子や商品が外から見えると、立ち寄りやすくなります

💡 ほどよい大きさに

歩いている人に発見される、看板の素材や色彩、大きさ等の「程よさ」を見極めましょう

💡 気温を和らげる

軒先にも様々な緑を配置し、居心地をよくしていきましょう

まちあかりをつくる

山形市では昔と今、そして未来の魅力ある七日町の風景を思い浮かべられる、安心して安全なまちあかりを計画しています。

家の灯り、店舗の灯り、建物から溢れ出る灯りはまちあかりを構成する大切な要素です。“風情とぬくもりを感じる”光を灯し、七日町に帰ってくる人々を温かく迎えましょう。



Q12

どんな明るさにしますか？



【C12】

行燈のような優しい明るさにしましょう



【Idea】

照明の光源が直接見えたり、まぶしさの強い照明があると、その光が目つぶしとなってまちなみが霞んでしまいます。行燈のようなまぶしさを抑えた、優しい明るさでまちあかりをつくっていくことで、まちなみに美しさと心安らぐ雰囲気をつくります。

Q13

どこを照らしますか？



【C13】

見せたいところを照らしましょう



【Idea】

周囲を全般的に照らすと単調な雰囲気になります。お店の看板や建物の特徴的な部分、庭先の樹木、店先の路面などの見せたいところを部分的に照らしていくと、まちなみにリズミカルな流れが生まれ、楽し気で賑わいのある雰囲気をつくります。

Q14

どんな光の色味に
しますか？



【C14】電球やろうそくのような、 自然な光の色味にしましょう



【Idea】

電球やろうそくのようなオレンジ色の光は、一般的に電球色と呼ばれています。その色味の光は、人々に安らぎを与え、温かく穏やかな雰囲気をつくるのに適しています。そのような光の色味で町全体をそろえることで、一体感のあるまちなみをつくることができます。

Q15

どの高さに
灯りを集めますか？



【C15】人に近い高さに
灯りを集めましょう



【Idea】

低い位置の灯りは、心身を落ち着かせる効果があります。まちあかりを人に近い高さに集めることで、落ち着きと親しみやすさを感じさせるような、風情のあるまちなみをつくることができます。



風情とぬくもりの
あるまちあかりへ

明るさ、色味、高さ、照らす場所を適切に配することで、風情とぬくもりのあるまちなみをつくることができます。帰ってくる人々を温かく迎え入れる、新しい七日町のまちあかりをめざしましょう。



行燈のような優しい灯りにする



電球のような自然な光の色味にする



見せたいところを照らす



人に近い高さに灯りを集める

見せかたにこだわる

人が歩いている時に視認出来る文字の大きさは約10mm以上です。つまりあまり大きな看板は“歩ける町”にとって必要ありません。

また、ロードサイドのような大きな看板は七日町の育んできた文化にそぐわないような気がします。

家や店の構えとともに、どういう見せかたをしていくのか考えていきましょう。



Q16

屋号はお店の顔 どのように見せますか？



粹七手帖 歩く人のための小さな看板 (No.38)

【C16】 外観とのバランスを意識し、 大きさや設置位置を考えましょう



【Idea】

大きな・派手な看板は確かに目立ちますが、ただ目立たせることが目的になると、外観やまちなみ、周囲の自然環境から『浮いて』しまいがちです。歩行者の目線を考慮すると、1 階の軒下に集約させる方がより効果的ですし、足元の看板に歩を緩め、立ち寄りやすい雰囲気をつくることにも繋がります。

Q17

いちばん見せたいものは 何ですか？



【C17】商品やサービスを見せましょう



【Idea】

店舗の様子が外から見えたり、どんなサービスが提供されているのかがわかる
と、お店に立ち寄るきっかけになりますし、通りに佇む人が増えると町に賑わい
が生まれます。季節毎に商品が入れ替わるお店では、その変化もまちなみの彩り
となります。

Q18

どのような素材 / 色を
使いますか？



【C18】小さいものこそ、素材が大事



【Idea】

入口まわりにある店舗の看板は歩く人の目に触れます。人にいちばん近い視線で、直接目に触れるものだからこそ、素材には拘りたいものです。建物の外装と同様に、できるだけ自然素材（木や布、鉄など）を使い、時間の経過とともに味わいや風格を増すようなしつらえを検討しましょう。



色は濃淡をうまく使いましょう。
鮮やかな色は小さく、足元に



【Idea】

『迷ったら、より穏やかな（低明度・低彩度）色を選ぶ』。これが色選びに失敗しないための基本です。見やすさのためには色の対比よりも濃淡（明暗）の差が重要です。また、鮮やかな色はごく小さな面積でも人目を惹きます。アクセントは『差し色』とも言われるように、ほんの少しの方が効果的です。

Q19

どんなチームで 取り組みますか？



【C19】様々な知見を通じ 対話を通してつくる

わからない場合は検索してみると普通になりました。驚くことに、調べると簡単に“答えらしきもの”に辿り着くことができます。ただ、そこに書かれるものは、一般的な解答だったり、情報が古かったりすることもあります。

もう一步踏み込むと、わからないことを専門にしているプロがいます。それらの記事を実証・経験・研究している人たちです。そうした人に聞いてみることもいいかもしれません。



粹七手帖 つくる編

発行 山形市まちづくり政策部まちづくり政策課
〒990-8540 山形県山形市旅籠町二丁目3-25
TEL:023-641-1212（代表）

校正 山形市・株式会社国際開発コンサルタンツ
編集 株式会社風景屋
本文・画像協力 Archishop Studio（視点1,2,3）
株式会社クリマ（視点4,6）
Lumimedia lab Inc（視点5）
写真 澤千晶（p.63）、依田彩（p.64 右上、p.65 左）



山形市